

出産前 NICU 見学における有用性と今後の課題

—母親が求める具体的支援内容の実現に向けて—

キーワード：NICU、産前訪問、母子関係

総合周産期母子医療センターNICU 井上 知美 植田 智美
朝根 愛子 増田 悠 橋本 綾

I はじめに

NICU は児の救命の場として重要であるだけでなく、母子及び家族関係をも視野に入れたファミリーケアが重要視されているが、NICU に入室した場合には必然的に母子分離状態となり、母の不安は増強するといわれている。現在、当所属ではその不安を軽減するための一つの方法として妊婦とその家族の希望者を対象に出産前 NICU 見学を実施している。先行研究では産前訪問を受け、漠然とした不安は安心へと変化した、対象との信頼関係の形成に有用であったとの報告がありその効果は明らかにされているが、実際に NICU を見学することによる有用性は明らかにされていない。そこで今回、見学を行った母親を対象に半構成面接を実施し母親が求める産前の具体的支援内容の実現に向けて検討したためここに報告する。

II 研究目的

NICU 見学前後での母親の思いの変化や、見学時の情報・見学方法が適切であったかを明らかにする。

III 研究方法

医師より院内歩行の許可の出ている全身状態の安定した妊婦で出産前 NICU 見学を行った母親を対象に半構成面接法を実施し、思いの変化や情報について検討した。

IV 倫理的配慮

対象者に研究の主旨、目的、プライバシーの保護、データの保存に配慮すること、個人的評価には影響のないことを口頭と書面にて説明し同意を得た。

本研究は、看護部看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。

V 結果

対象の背景：妊娠 33 週台に出産前 NICU 見学を行った初産婦 1 名

母親の思いの変化に関しては、見学実施前は、「お腹の中の自分の子が病気と分かって、すごい不安で・・・」

「生きていけるのか心配」など不安や心配する発言が多かった。しかし見学実施後は、「見に行けたのはよかった」「ちょっと安心した」との発言あり、見学した事

によって、よかった・安心したとの発言が増えていた。情報と見学方法が適切であったかという点に関しては、見学実施前は、「生まれてどこで治療してもらうのか」「どんな雰囲気か」「どんな人に看てもらえるのか」との発言あり、漠然とした NICU のイメージや雰囲気しかなかった。実施後には、「抱き方やおっぱいのあげ方を知れてうれしかった」「生まれてから考えよう」「おじいちゃんおばあちゃんも見れたらよかった」「一人で来るよりは主人と一緒に見てもらってよかった」「実際に面会に入ってはる時間とかも見れたらよかった」との発言が聞かれた。

VI 考察

思いの変化に関しては、母親の発言より、見学実施前の不安・心配などのマイナスの発言から、安心した・うれしかったなどのプラスの発言に変化しており、出産前の NICU 見学は母親の不安を軽減するための方法として有用であったといえる。さらに情報と見学については、実際に見学したことによって、漠然としていたイメージが具体的にになり、知りたい情報が明らかになった。しかし、インタビューでは母親より実際の面会時間を見学したかった、祖父母も一緒に見学したかったなどの発言もあり、情報が不十分な点や見学方法の見直しが必要な点が明らかとなった。そして、今回は研究メンバーにより見学説明を実施したが、黒川¹⁾は児の担当看護師が行うことによって、母との信頼関係の形成に効果的であると述べておりその点についても今後検討が必要である。

VII おわりに

今回の症例検討では事前に NICU を見学することの有用性は明らかとなった。しかし、児の状態や家族背景などによっても妊婦の思いは変化してくるといえるため今後も引き続き実施し個々に応じた出産前 NICU 見学が実施できるよう検討していく。

引用文献

1) 黒川洋子：産前訪問を受けた MFICU 入院中のハイリスク妊婦の思い、第 41 回母性看護、64-66、2010